

# 日韓の子どもと若者の間に 新たな“공감대 (共感帯)”の創造を

静岡大学助教授  
馬居政幸

## 1. 韓国の学校を訪ね続けて

韓国は、周知のように1980年代に「漢江の奇跡」と呼ばれる経済の高度成長を達成し、ソウルオリンピックという国家イベントを見事に成功させ、ニーズ (NIES) 諸国の優等生として国際社会に踊り出た。その後、東西冷戦構造の解体という世界史の変動の中で、現在は急激な産業化に伴う社会の構造変動の真っ只中にある。

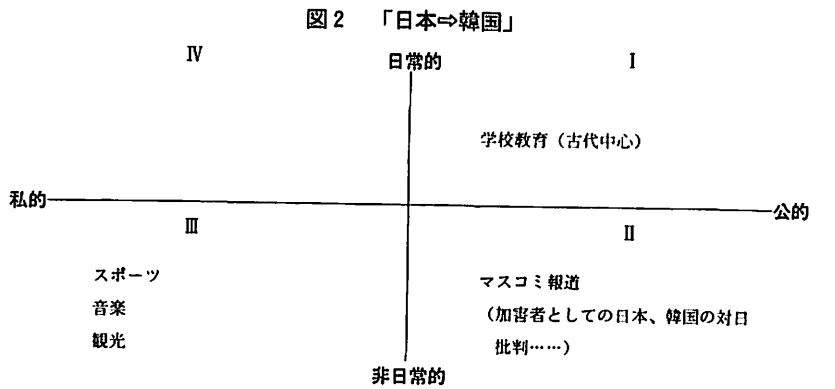
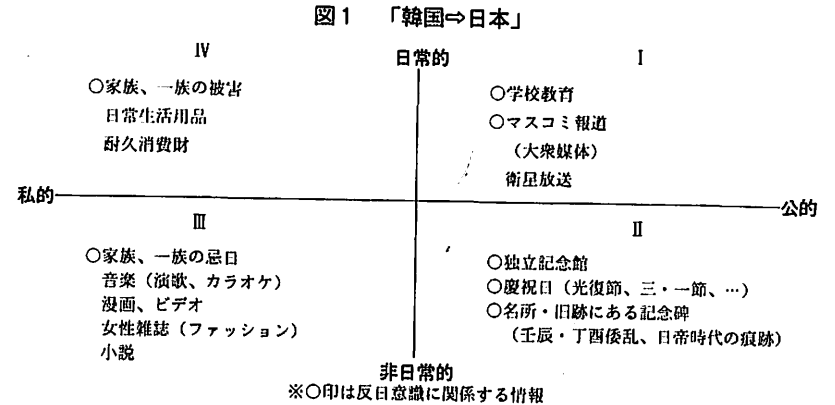
私は、この韓国社会の現状、とりわけ、学校や家庭や地域社会における子どもの教育の現状を自分の身体で感得することを目的に、1986年1月4日に初めて訪れて以来、韓国への旅を繰り返してきた。そして、小学校や中学校の授業に参加し、小学生、中学生、高校生、大学生と対話を重ねてきた。その過程で構造的には類似した韓国の教育システムにおいて、日本とは異なる子どもや若者の“学びと育ちの現場”を認識することができた。

なかでも、小・中・高いずれの教室でも、教壇に立った私に対して、明確に自分の意思を持って質問し反論してくれたことに、驚きと感動を禁じえなかった。日本の教室において、小、中、高と学年と学校が上がるにしたがい意見を述べなくなる授業風景に見なれていたからである。あるいは、先生方が表情豊かに語りかける授業から、日本が韓国に学ぶべき教育のあり方を見出すことができた。1)

しかし、その一方で、日本と韓国の相互理解を進める上で解決しなければならない“現状”についても認識せざるをえなかった。

図1は、私が韓国での生活と資料収集やインタビュー調査により得た韓国における日本に関する文化・情報を、「公的-私的」、「日常的-非日常的」という二つの軸で分類したものである。図2は、同様の視点から日本における韓国に関する文化・情報を分類したものである。両国の情報の量と性格の差異に注目していただきたい。

「日本と韓国における相互の国に関する文化・情報の性格の差異」



## 2. 両国の相互認識に関する情報の差異

認識し解決すべき第一の課題は、図1が示すように、I～IVの全ての領域に“反日意識”に関する情報が存在するという“現状”である。それは、日本の加害性という“歴史的事実の重み”を基盤に、小学校から中学・高校へと成長するにしたがって、次の①～④のような社会過程が総合されることにより、戦後 (解放後) 40数年を経てまもなく、“反日

意識”は韓国の子どもや若者の間により強く育成されている、という“現状”である。

- ①日常的に学校教育を通じて教えられる公的な事実 (I)
- ②日常的にテレビ・新聞等の情報環境による公的な再確認 (I)
- ③日常の人間関係や生活習慣に刻まれた私的な事実 (IV)
- ④慶祝日や名所・旧跡の碑文・あるいは家族や一族の命日などで繰り返し確認される非日常的で聖的な価値に基づく公的か

つ私的な正当化(Ⅱ、Ⅲ)

⑤このような韓国の現状を無視する(理解できない)としか韓国の人達にとらえられない日本の側の対応と、その事実を増幅する報道(Ⅰ)

第二は、このような社会過程とは別に、生活用品や耐久消費財など“日常生活に使用するモノ”(Ⅳ)の中に、あるいはカラオケ、ファッション、漫画、アニメなどの“遊びの世界”(Ⅲ)に、“日本の現代文化”が実質的に浸透しているという“現状”である。

第三は、このように日常的・非日常的に育成される反日意識と、顕在的・潜在的に浸透する日本文化の狭間に生じる溝を埋めるために、日本の“現状”とりわけ同世代の“現状”の情報への欲求が非常に強いという、韓国の子どもや若者の意識の“現状”である。

第四は、このような韓国の子どもや若者の“現状”を韓国教育関係者が必ずしも正確に捉えておらず、その“欲求に応じた適切な答え”を用意するにはいたっていないと思わざるをえない、という“現状”である。

さらに、上記の四つの“現状認識”を踏まえ、第五として、次の認識を持つようになった。それは、一方でこのような子どもや若者の欲求を生み出す原因であるとともに、他方でその欲求に対する実質的な“応え”と“答え”となっているのが、日本の漫画のハングル訳や日本の漫画に学んだ韓国の漫画文化ではないか、という“現状認識”である。

### 3. 韓国の漫画文化関係者へのインタビュー調査から

私は昨年(1992年)の4月、6月、8月、12月の四度にわたり、韓国全体で数十万部発行されている漫画雑誌の編集責任者の方達をはじめ、韓国漫画文化に関係する人達にインタビュー調査を試みた。特に、日本の漫画が同時進行的に翻訳され出版される現状についての評価とその編集過程について、あるいは広く韓国漫画文化と日本とのかかわりについて質問した。そしてその結果を次の三つの傾

向にまとめることができた。

- ①日本の漫画は韓国の子どもに有害であり文化侵略でもある
- ②過渡的なものとして日本の漫画を受け入れるが本意ではない
- ③韓国の漫画文化を豊かにするために日本の漫画を積極的に取り入れる

残念ながら、①から③の順序はインタビューで得た意見の多さの順序でもある。ここでも日本への厳しい認識を確認せざるをえなかった。ただし、韓国で出版されている日本の漫画の多くはライセンスを得ていない海賊版であることも指摘しておかねばならない。

私の日本での取材では、韓国の出版社が正式に契約している日本の出版社は講談社、集英社、小学館、秋田書店の4社のみである。それも4雑誌13タイトルに限定されている。また、海賊版の中には、子どもではなく青年層を対象とした日本の漫画も多い。そのため、特に①のような指摘に対して、日本の出版社は、いわれない非難、としか答えることができないのが実情である。

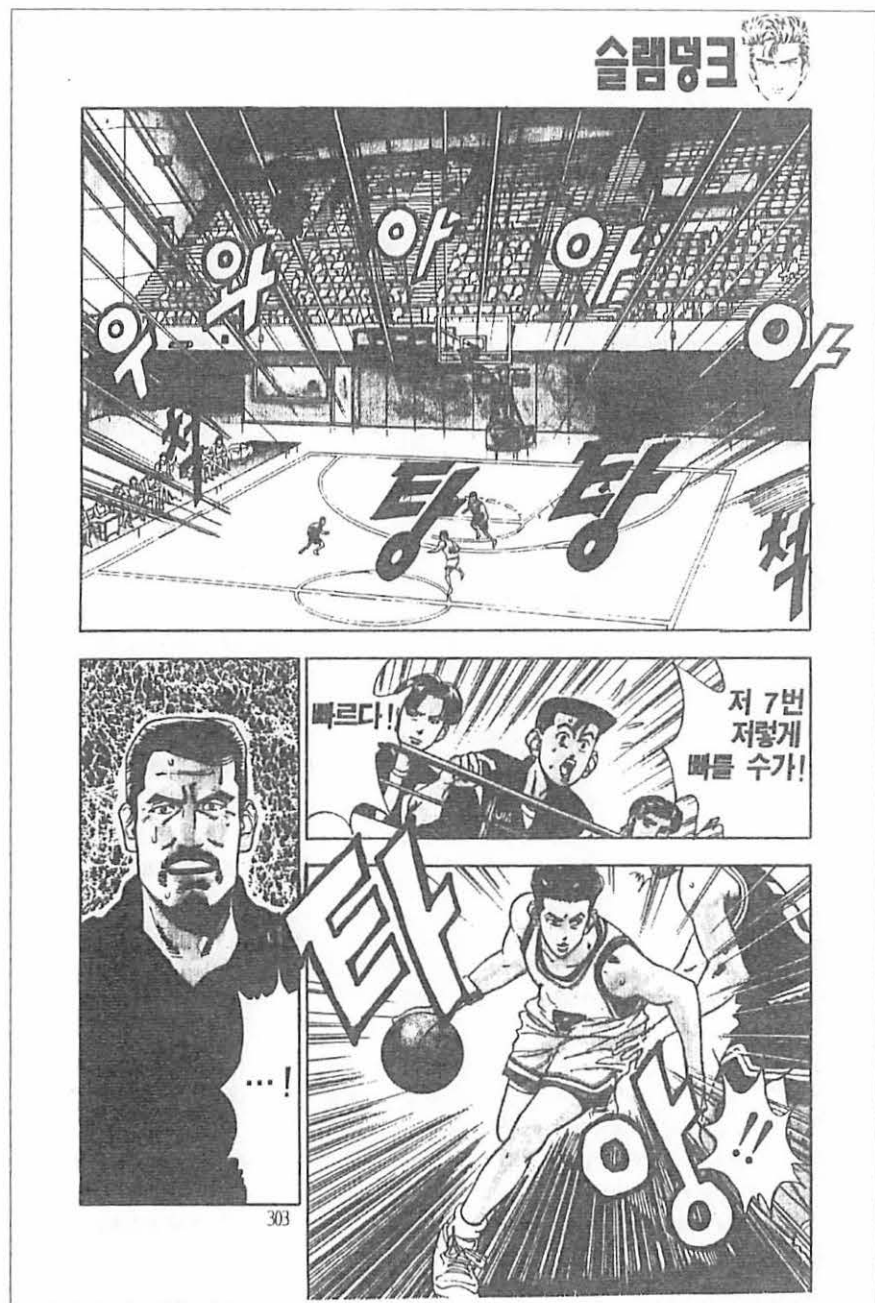
しかし、このような困難な現状を克服し、日本と韓国の子どもや若者が“真のイコールパートナーとして共に生きる世界”を新たに創造するための手掛かりとなる言葉を、韓国でのインタビューの過程で見出すこともできた。それは、私の「なぜ日本でも韓国でも、これほど漫画が子どもや若者に受け入れられるのか」との質問に対して、世界の漫画文化の現状を俯瞰しつつ答えてくれた韓国の漫画雑誌『少年チャンプ』編集部長の黄卿泰(ファン ギョンテ)氏の次の言葉である。

「漫画には、作者と読者の間に“コンガムデー공감대(共感帯)”があるからです。」

### 4. 新たな“コンガムデー공감대(共感帯)”の創造

図3は、日本の『少年ジャンプ』(集英社)に連載中の「スラムダンク」のハングル訳の印刷原稿である。黄部長が編集する少年チャンプ編集部でいただいたものである。

図3 韓国の「スラムダンク」



(井上雄彦著/集英社「少年ジャンプ」連載/大元出版「週刊少年チャンプ」連載)

『少年チャンプ』には、「スラムダンク」に加え「ダイの大冒険」が週刊で、「幽遊白書」が月刊で掲載されている。さらにライバル誌である『IQジャンプ』には、「ドラゴンボール」が掲載されている。いずれも、日本で発行部数週600万部を誇る『少年ジャンプ』に連載中の人気漫画である。それが、日本の集英社との正式契約に基づき、日本とほぼリアルタイムでハングルに訳され、韓国の本屋の店頭に並ぶわけである。

漫画雑誌の韓国における発行部数は、私の取材によれば、『少年チャンプ』と『IQジャンプ』を合わせて約50万部ぐらいになるとのこと。ただし、漫画雑誌は、通常、一人で読むのではなく友人の間で回し読まれることが多い。特に一冊1500ウォン（約250円）という値段は、韓国の子どもには高価であるため、回し読まれる率はかなり高いようである。その意味で漫画雑誌の実際の読者数は、発行部数の数倍であると考えられる。

さらに、日本の漫画は週刊誌連載のみでない。日本と同様にアニメもテレビやビデオを通じて見る事ができる。また、先に指摘したように、海賊版の単行本が数多く発行されている。私見だが、これらの多様な発行形態をあわせれば、結果的には、日本の漫画は、日本とそれほど変わらない広がり読者層を韓国に獲得しているとも考えられる。

このように、①日本と韓国の子どもと若者が同じ漫画を、それもリアルタイムで読んでいるという事実。また、②漫画の人気の秘密は作者と読者の間にある“コンガムデー공감대(共感帯)”であるという黄部長の指摘。この二つは、両国の子どもと若者の間に、日本の漫画を媒介に意図せざる過程において、“コンガムデー공감대(共感帯)”の基盤が形成されつつあることを示唆していないだろうか。

他方、あえて言うまでもなく作者と読者は互いに異なる存在である。したがって、“コンガムデー공감대(共感帯)”は、作者と読

者が同一の存在になることからではなく、相互に異なる存在であることを認め合いつつ、しかし作品という共通の場において、両者が互いに相互の世界を共有しようとする時に、初めて生じるものとする。

これが、先に、“コンガムデー공감대(共感帯)”という言葉で、「日本と韓国の子どもや若者が、真のイコールパートナーとして共に生きる世界を新たに創造するための手掛かりとなる言葉」として位置づけた理由である。

思うに、これまで、両国の歴史的事実についての教育のあり方の相違に起因する韓国の人達の日本への“いらだち(非難)”と、日本の人達の韓国への“負目(無関心)”が相乗的に作用して、両国の教育関係者が、互いの“現状”に“同じ目の高さ”で“知りあい、学びあい、教えあい”機会を見失いがちであったと考える。その結果が、図1と図2の差ではないだろうか。

確かに日本と韓国の間には、今なお様々な問題があり、その解決への責任の多くは日本の側にあることは否定できない。だがそれゆえにこそ、日韓の子どもと若者の間に、互いの異質性を“認め合い、生かし合い、学び合い、教え合える”基盤となる新たな“コンガムデー공감대(共感帯)”を創造する契機を積極的に見出し育むことが最も重要な課題と考える。その確かな手応えが日本と韓国の漫画文化にあることを改めて提起しておきたい。

#### 注 記

1) 具体的なことについては、以下の抽稿を参照いただきたい。①『「近くて遠い国」で学んだこと』(『PART II』№17 連続セミナー授業を創る会) ②『“生活者” にとっての“意味”と“思い”からの再構成を』(『教育科学 社会科教育』№358 明治図書) ③『国際社会と公民教育』(『公民教育の理論と実践』日本公民教育学会編 第一学習社) ④『朝鮮半島を解く迫力あるネタはこれだ』(『教育科学 社会科教育』№372 明治図書)

## 星空に下校する韓国の高校生

慶熙ホテル経営専門大学・韓国外国語大学講師

夫 伯

1993年2月現在、韓国には1700を超える高校があり、1学年あたり約70万人の高校生が学んでいるが、韓国でも日本同様、否、日本をはるかに上回る受験競争が繰り広げられている。以下、私が目にし耳にした入試にまつわる韓国の高校教育、及び高校生たちの現状を要略したいと思う。

### ハードスケジュールな高校生

韓国の平均的な高校生の履修単位数及び受験科目数は過多きわまりない。この二点が起

因して、彼らの生活は至極ハードなものとならざるを得ない。

卒業までに履修されるべき単位数がどれほど「過多」であるかという点、韓国でも文系と理系に分かれるので一定ではないが、その数なんと204~210単位。この数字は日本のその約2.5倍に相当している。

この数字に包含された重みをもう少し具体化させると、たとえば普通科高校の2年生は1学期間に、以下の表に示したように多くの科目をこなしている。

普通科高校2年生によって1学期間に履修される科目群の一例

共通 必須科目	国語、一般数学、英Ⅰ、国史、政経、科学、倫理、音楽、美術、体育、教練、第二外国語、技術、産業、教養選択(哲学、教育学などから1科目選択)、特別活動
文系による 選択科目	文学、漢文、作文または文法、数Ⅰ、英Ⅱ、社会科から1科目選択、科学Ⅱ
理系による 選択科目	文学、漢文、作文、数Ⅱ、英Ⅱ、物理、化学、生物・地球科学から1科目選択

つまり、1週間に、文系は23、理系は24もの科目を学んでいるのである。

これらの科目はふつう正規の授業時間を通して消化される。そしてさらに、冒頭でも触れた「過」こくなまでに「多」すぎる入試科目の重圧も加算される。したがって、彼らは2年生になると、学生にとってはボーナスと

もいうべき年間3か月の長期休暇を受験に向けての補習授業という名目の下に半分に減俸され、のみならず、学期中には補習授業は無論のこと、自律学習(日本でいう受験学習のこと。国の義務づけではないが、ほとんどの高校で受験準備を学校で行うことを奨励している)という増税をも被る。

刊行のことば

私ども福武書店は創業以来38年間、教育図書出版社として、小・中・高等学校において、学習・進路指導に関する教育情報サービスを行い、また、微力ながら幼児から小・中・高校生の家庭学習のお手伝いをしてまいりました。その間、世の中の変化は大きく、それは子どもたちの意識や生活にもさまざまな変化を生じさせています。児童・生徒のこうした変化を知ることは、21世紀の新しい教育を考え、実践するうえでも、きわめて大切なことと存じます。

そうした観点から「モノグラフ・高校生'93」は、高校生を正しく理解するための資料として、1980年に創刊以来、多くの読者の方々に支えられ、今日まで37巻を発売することができました。今後もさまざまなテーマの調査を実施し、その結果をお届けしてまいります。

高校生の生活や意識を知るひとつの手がかりとして、ご活用いただければ幸いです。

(株)福武書店  
教育研究所 島内行夫

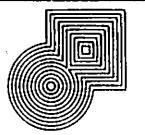
「モノグラフ・高校生」テーマ一覧

- |                                      |                                       |
|--------------------------------------|---------------------------------------|
| vol. 1 高校生の描く未来像-その進路と大学選択-          | vol.19 「いじめ」と学校文化                     |
| vol. 2 高校生の生徒文化                      | vol.20 大学へ進学しない生徒たち                   |
| vol. 3 高校間格差-その実像と虚像-                | vol.21 若者文化-高校生と大学生の比較-               |
| vol. 4 異性・結婚・家庭                      | vol.22 文化祭                            |
| vol. 5 高校生の校外生活と価値観                  | vol.23 若者は保守化したのか                     |
| vol. 6 高校生の政治意識                      | vol.24 高校生の校内行動<br>-いごこちのよい心理的空間を求めて- |
| vol. 7 高校生活をふりかえって-大学生の意見-           | vol.25 推薦入学に対する高校生の意見                 |
| vol. 8 職業科に学ぶ高校生<br>-過去・現在・未来の生活と意識- | vol.26 高校生と性                          |
| vol. 9 高校生活の意味                       | vol.27 高校生の金銭感覚                       |
| vol.10 高校教師の教育観とライフサイクル              | vol.28 高校教師の生徒観とライフスタイル               |
| vol.11 「おとなになる」ことのイメージ               | vol.29 高校生の国際感覚                       |
| vol.12 高校部活動、いま                      | vol.30 高校生の親子関係                       |
| vol.13 高校生の親子関係<br>-反抗期の喪失をめぐって-     | vol.31 高校生の地域感覚                       |
| vol.14 高校生の抱く学業成績観                   | vol.32 親(おや)性<br>-人とかかわる暖かさをどう育てるか-   |
| vol.15 高校生と情報行動                      | vol.33 高校生の教科観                        |
| vol.16 進路選択と進路指導                     | vol.34 高校生たちのアルバイト体験                  |
| vol.17 女子高校生<br>-女の子らしさへのあこがれ-       | vol.35 高校生たちのおしゃれ                     |
| vol.18 高校生の生活時間                      | vol.36 高校生は変わったのか<br>-1980年調査と比較して-   |

※ vol. 1~26, 34, 36は在庫切れです。

モノグラフ・高校生'93

vol. 37 日韓高校生の大学受験



静岡大学教授 深谷昌志

◎目次

【座談会】日韓比較調査から-韓国高校生の大学進学をめぐって	3
【調査レポート】日韓高校生の大学受験	11
要約	12
第I章 高校生の生活	
1. テレビ視聴	14
2. 勉強時間	18
第II章 大学進学を目指して	
1. 高校生活	23
2. 学業成績	27
3. 将来への見通し	31
第III章 将来の家庭生活	
1. 結婚の型	37
2. 結婚生活	40
3. 女性の生き方	44
第IV章 日韓のイメージ	
1. アメリカの高校生	47
2. 日本の高校生	53
3. 韓国の高校生	56
【小学生を対象とした国際比較調査から】(抜粋)	59
第I章 子どもの描く未来の自分	
1. いつまで学校へ行きたいか	61
2. つきたい職業	63
3. ソウルの受験勉強	67
第II章 子どもの幸福感をめぐって	
1. 起床から就寝まで	70
2. 食事のとき空腹か	72
3. 灰色の気分	73
4. 子どもたちのしあわせ感	75
【特別寄稿】	
日韓の子どもと若者の間に新たな“ <sup>ファンダム</sup> 共感帯”の創造を	馬居政幸 78
星空に下校する韓国の高校生	夫 伯 83
資料1 調査票見本(日本語版・韓国語版)	87
資料2 国別集計表	101

\*おことわり:本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。

●ご購入ご希望の場合は下記までご連絡ください。

〒700 岡山市南方3-7-17 TEL(086)225-1100 福武書店教育研究所 モノグラフ担当